

今日はII列王記7章から「良い知らせ」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 良い知らせ 1-9

今日の箇所は6章からの続きの出来事です。6章後半ではサマリアは大飢饉とアラム軍の包囲によって食べ物が無くなってしまいました。王はその責任をエリシャに問い、エリシャを殺そうとしました。そこで王は、エリシャのもとに一人の使者を遣わしました。その使者はエリシャに対して、「私は何を期待しなければならないのか」との王の言葉を伝えました。これは「もはや主に何も期待しない。自分たちは飢饉とアラム軍によって滅ぼされるだけだ」ということです。それに対するエリシャの言葉が今日の1節です。

1-2【1 エリシャは言った。「主のことばを聞きなさい。主はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの門で、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られるようになる。』」2 しかし、侍従で、王が頼みにしていた者が、神の人に答えて言った。「たとえ主が天に窓を作られたとしても、そんなことがあるだろうか。」そこで、エリシャは言った。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。】

6章では飢饉のためにろばの頭一つが現在の価格で35万円、鳩の糞300ccが22,000円で売られていました。それに対してエリシャは「主のことばを聞きなさい。主はこう言われる。明日の今頃には上等の小麦粉1セアが1シェケル、現在の価格では1kg350円、大麦2セアが1kg175円で売られるようになる」と伝えました。2節では王がエリシャに遣わした使者は「侍従で、王が頼みにしていた者」すなわち王の側近であることがわかります。その彼がエリシャに言ったのです。「たとえ主が天に窓を作られたとしても、そんなことがあるだろうか。」王の侍従は主なる神でもこのようなことはできないと言って、主と主のことばを信じないと言いました。それに対してエリシャは彼に言いました。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」この言葉が7章後半で成就します。

3-4【3 さて、ツアラアトに冒された四人の人が、町の門の入り口にいた。彼らは互いに言った。「われわれはどうして死ぬまでここに座っていなければならないのか。4 たとえ町に入ろうと言ったところで、町は食糧難だから、われわれはそこで死ななければならない。ここに座っていても死ぬだけだ。さあ今、アラムの陣営に入り込もう。もし彼らがわれわれを生かしておいてくれるなら、われわれは生き延びられる。もし殺すなら、そのときは死ぬまでのことだ。】

ツアラアトは現代の医学では分からない皮膚病です。ツアラアトになった人は、律法によって町の外に住まなければなりません。町の門の入り口にいた4人のツアラアトに冒された人は、互いに言いました。「たとえ町に入っても食べ物がなくそこで死んでしまう。ここに座っていても死ぬだけだ。アラムの陣営に行けば、生かしておいてくれるかもしれない。殺されるなら死ぬまでだ。」彼らはわずかな望みをいだいて、アラムの陣営に行くことにしたのです。

5-7【5 こうして、彼らはアラムの陣営に行こうと、夕暮れになって立ち上がり、アラムの陣営の端まで来た。すると、なんと、そこにはだれもいなかった。6 これは、主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせたので、彼らが口々に「見よ。イスラエルの王が、ヒッタイト人の王たち、エジプトの王たちを雇って、われわれを襲って来る」と言い、7 夕暮れに立って逃げ、自分たちの天幕や馬やろば、陣営をそのまま置き去りにして、いのちからがら逃げ去ったからであつた。】

4人は夕方になってアラムの陣営の端まで行きました。すると、なんと、そこには誰もいませんでした。それは主がアラムの陣営に、戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせたので、彼らが口々に「見よ。イスラエルの王が、ヒッタイト人の王たち、エジプトの王たちを雇って、われわれを襲って来る」と言って、いのちからがら逃げ去ったからです。その時彼らは馬やろばはじめあらゆるものを置き去りにしました。日本では1180年、源平合戦の最初の戦いである富士川の戦いがありました。そのとき、平家は水鳥の大群が一気に飛び立った音を聞き、源氏が攻めて来たと思い、馬や武器さえ残して逃げ、源氏は戦わずして勝利しました。主がアラム軍に聞かせた音はもっとすごかったのでしょう。

8-9【8 ツアラアトに冒されたこの人たちは、陣営の端に来て、一つの天幕に入って食べたり飲んだりし、そこから銀や金や衣服を持ち出して隠した。また戻って来てはほかの天幕に入り、そこからも持ち出して隠した。9 彼らは互いに言った。「われわれのしていることは正しくない。今日は良い知らせの日なのに、われわれはためらっている。もし明け方まで待っていたら、罰を受けるだろう。さあ、行こう。行って王の家に知らせよう。」

アラムの陣営に入った4人は、彼らが残した食べ物でまず腹いっぱい食べて、空腹を満たしました。その後、金銀衣服を持ち出して隠し、戻って来てはまた持ち出して隠しました。そうするうちに、彼らは互いに言いました。「我々のしていることは正しくない。今日は良い知らせの日なのに、我々はためらっている。もし明け方まで待っていたら、罰を受けるだろう。さあ、行こう。行って王の家に知らせよう。」彼らは町の中で空腹とアラム軍の脅威におびえている人たちのことを思いました。そしてこの良い知らせを自分たちだけ独り占めしていいのだろうかと考え、「このままだと神から罰を受けるだろう。さあ、行こう。行って王の家に知らせよう」と言って、町に戻りました。

第1の点で覚えたいことは、良い知らせについてです。ツアラアトに冒された4人にとって、そしてイスラエル人にとっての良い知らせとは、アラム軍が逃げ、たくさんの分捕り物があり、彼らが残していった食べ物で人々のいのちは救われるということです。この良い知らせという言葉は、新約聖書では福音と言われます。福音は良い知らせ、グッドニュースという意味です。そして新約における良い知らせ、福音とは、救い主イエスを信じる者はすべての罪が赦されて救われるということです。私たちもイエスを信じて救われ、罪の赦し、永遠のいのち、神の子どもとしての特権にあずかりました。このすばらしい救いを独り占めしていいのかと、今日の箇所から問われます。4人は独り占めするのは良くない、他のイスラエル人にも伝えなければと思い、良い知らせを伝えるに行きました。私たちはどうでしょうか。聖書は「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい」と教えます。私たちが「さあ、行こう」と言って、まだイエスを知らない人にこの良い知らせ、イエスの福音を伝えるに行きましょう。

2. 信仰への道 10-15

10-12【10 彼らは町に入って門衛を呼び、彼らに告げた。「われわれがアラムの陣営に入ってみると、なんとそこにはだれの姿もなく、人の声もありませんでした。ただ、馬やろばがつながれたままで、天幕もそっくりそのままでした。」11 そこで門衛たちは叫んで、門内の王の家に告げた。12 王は夜中に起きて家来たちに言った。「アラム人がわれわれに対して謀ったことをおまえたちに教えよう。彼らはわれわれが飢えているのを知っているの、陣営から出て行って野に隠れ、『イスラエル人が町から出たら生け捕りにし、それから町に押し入ろう』と考えているのだ。】

4 人は町に入って門衛に事の次第を伝えました。門衛は叫んで門内の王の家に伝えました。王はこれを聞き、夜中に起きて家来たちに言いました。「これはアラム軍の策略だ。飢えている我々が町から出て来たところを、隠れているアラム軍が出て来て、我々を生捕りにし、町を占領しようと考えているのだ。」王はにわかはこの良い知らせを信じられませんでした。

13-15【13 すると、家来の一人が答えた。「それでは、だれかにこの町に残っている馬の中から五頭を取らせ、遣わして調べさせてみましょう。どうせ、この町に残っているイスラエルのすべての民衆も、すでに滅んだイスラエルのすべての民衆と同じ目にあうのですから。」14 彼らが二台分の戦車の馬を取ると、王は「行って確かめて来い」と命じて、アラムの軍勢を追わせた。15 彼らはアラム人を追って、ヨルダン川まで行った。ところが、なんと、道はいたるところ、アラム人が慌てて逃げるときに捨てていった衣服や武具でいっぱいであった。使者たちは帰って来て、このことを王に報告した。】

もしこの知らせを信じないという王の言葉で終わってしまえば、彼らは生き延びなかったでしょう。けれども、家来の一人が賢い提案をしました。「誰かに町に残っている 5 頭の馬を取らせ、本当かどうか調べさせましょう。町に残っていても、滅んでしまうのですから。」王はこの提案を受けて、偵察に行く人に「行って確かめて来い」と命じて、アラムの軍勢を追わせました。彼らがアラム軍を追ひ、ヨルダン川まで行くと、道々彼らが逃げる時に捨てていったものでいっぱいになっていました。彼らは急いで戻り、王にこのことを報告しました。王は家来が言うとおり、本当かどうかを調べさせ、確かめた結果、良い知らせを受け取ることができました。

第2の点で覚えないことは信仰への道についてです。私たちが最初に福音を聞いた時はどうだったのでしょうか。すぐに信じられなかったかもしれませんが、疑いや無関心でいたかもしれませんが。けれどもそこで終わっていれば、良い知らせは私たちの人生にもたらされませんでした。大切なのは、本当にその通りなのか調べ、確かめることです。私たちもそうだったと思いますが、まず教会に通い続け、聖書を学び続けることです。また個人的に聖書を読み、聖書通信講座や初心者クラスなどで聖書を調べ、確かめることです。そのような中でイエスがまことの救い主であり、自分にはイエスの救いが必要であることを知り、信じるようになるのです。パウロがベレヤの町で伝道した時に、ベレヤの人は果たしてそのとおりかどうか、毎日聖書を調べました。そのため多くの人がイエスを救い主と信じ、クリスチャンとなりました。またクリスチャンにとっても、聖書を読み、その意味を調べ、確かめることを通して、みことばのすばらしさをさらに知り、クリスチャンとして成長していくことができるのです。

3. 主のことばのとおり 16-20

16-20【16 そこで、民は出て行ってアラムの陣営をかすめ奪ったので、主のことばのとおり、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られた。17 王は例の侍従、頼みにしていた侍従を門の管理に当たさせたが、民が門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。王が神の人のところまで下って行ったときに、神の人が告げたことばのとおりであった。18 かつて神の人が王に、「明日の今ごろ、サマリアの門で、大麦二セアが一シェケルで、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られるようになる」と言ったときに、19 侍従は神の人に答えて、「たとえ主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか」と言った。そこで、エリシャは「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない」と言った。20 そのとおりのことが彼に実現した。民が門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。】

王の知らせを受けて、町の中にいた民は一斉に外に出て行き、アラムの陣営が残していったものをすべてかすめ奪いました。その結果、主のことばのとおり、上等の小麦粉一セアが一シェケルで、大麦二セアが一シェケルで売られました。ところが、昨日エリシャに対して「たとえ主が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか」と言ったあの王の侍従はどうなったのでしょうか。王は彼を門の管理に当たせました。ところが多くの人が門に殺到したため、彼は民に踏みつけられて死んでしまいました。その結果、「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない」とエリシャが言った言葉が実現したのです。

第3の点で覚えないことは「主のことばのとおり」ということです。エリシャが「明日の今ごろ、サマリアの門で、大麦二セアが一シェケルで、上等の小麦粉一セアが一シェケルで売られるようになる」と言った主のことばは、そのとおり実現しました。人間的には不可能と思えることも、主が言われればその通り実現するのです。そして残念ながら、主のことばを信じない人には、実現する主のことばの祝福にはあずかれないのです。

私たちもイエスを救い主と信じた時に、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」という主のことばのとおり、神の子どもとして新生し、神の救いを受け、神を天の父と呼び、神の民の交わりに入れられました。もし信じなかったなら、神の救いを経験することはありませんでした。信じたことによって、イエスの福音が主のことばのとおり、本当に良い知らせであることを心から知ることができました。そして、イエスの福音は自分だけでなく、全ての人にとっての良い知らせであることを知ったので、ほかの人にもイエスの福音を知ってほしいと願うようになったのです。

主はパウロがコリントで伝道していた時に、彼を励まして言われました。「恐れなくて語り続けなさい。黙ってはいけない。あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」(使徒 18:9-10)そこでパウロはコリントで1年半腰を据えて、神のことばを教え続けた結果、コリント教会が誕生しました。

このみことばは私たちに対するみことばでもあります。私たちも「この町にはわたしの民がたくさんいる」との主の約束を信じ、良い知らせであるイエスの福音を、これからも恐れなくて語り続ける者となりましょう。